

ヨーロッパの日本語教育 事情についての覚え書き

木村宗男

日本で日本語教育という場合、一般に実用となる日本語能力を与えることを意味する。目指すところは一般教育における外国語教育の場合とは異なるものがある。外国の日本語教育も一般教養科目として行なわれることはまれで、多くは専門的日本研究を目的としているので実用を目指している。ただその実用の意味に読解を主とするか、それに伴って会話能力までも含ませるかどうかの違いがある。これまで見てきたヨーロッパ、イギリスの各大学とも、会話能力を無視しているわけではないが、教育条件によって読解能力に重点がおかれる。学制によって限られた年限内に専門教育としての日本研究の学習を一応終えさせるために、専門分野の読解能力を目標としたカリキュラムが組まれるというわけである。

その結果、読解教材には急傾斜の段階づけがなされる。語研の（日本国内のと言ってもいい）日本語教育で言えば、中級をとばして、上級に取り組むと思えばいい。われわれ（日本国内）の中級教材は専門的読解にはいる前の準備段階として、全般的な日本語能力を固める目的で編まれており、内容の点では専門分野と直接には係わりのないものが多い。

この中級段階を抜いて、内容的に高度のものを教材として使用する授業が、母国語を使って行なわれる。語句や文の言いかえが既習語のできる場合は日本語でなされるが、文の解釈、内容の解説は母国語で与えられる。学生には口頭翻訳が課せられる。学生にできないとき、教師が翻訳するというようにして授業が進められるのが一般的のようである。学生は予習として、新出語句を抜き出し、辞書によって読み方と対訳を調べて来ている。多くの場合、教師による予備的提示は与えられない。したがって学生は漢字、熟語の読み方から調べなければならぬ。Nelsonの漢英辞典と研究社の和英大辞典がよく使われる。どの学生も少なくともこれだけの準備をしてノートに書き留めてくると見た。予習しないで来たのでは全然理解できない授業が行なわれるのである。教師の与える翻訳は必ずしも文

章全体を訳すのではない。学生のできない部分を補っては次へ進む。全訳をするときには、正常な母国語の文というよりも、日本語の構造が理解しやすいような形で与えられる。テキストとして使用するプリントが、時間のはじめに配られて、すぐに授業にはいるという“unseen text”の時間も必ず設けられている。

教材内容の解説は母国語でくわしくなされる。これまでに与えられた関連的事項について、学生はよく覚えている。日本語の授業以外の母国語による日本の歴史・政治・経済・社会などについての講義で得た知識が日本語理解の助けになっているようである。学生の母国語を使って教えるということも、教師と学生の母国語が共通でしかも（これが大切なことだが）教師が日本語について深い造詣を持つ場合、読解・翻訳に関する限り、効果をあげることができると見える。

授業は、決してかゆい所へ手の届くようなものではなく、学生自身の努力が足りなければ到底ついていけないと思われるきびしいやり方である。この点が一般教育としての外国語と異なる点であろう。日本語ないし日本研究を専攻として選んだ学生にとっては日本語が最も重要な科目であり、しかも、日本語学習の困難なことは承知の上であるから、努力を要するのは当然のことと心得ている。いかに努力しても及ばないとわかれば、方向転換を計らなければならない。そもそも大学教育というものが、特に選ばれたもののみを対象としている国々であるから、困難を強いる教師も、それを克服しようとする学生も、しごく当然のことと考えている。

しかし、日本語教育改善の努力が払われていないわけでは決してない。学習を容易に行なわせようという方向にではなくて、より短期間に、より高度の目標に到達させるという方向に努力が向けられている。